
とある交渉の能力譲渡《キャパシティトランスター》

winz

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある交渉の能力譲渡《キャパシティトランスター》

【Nコード】

N4236N

【作者名】

winz

【あらすじ】

階段を変な下り方で下り、死んでしまった主人公。彼は神様の同情で超電磁砲の世界に転生することに。能力は自分にはまったく使えない能力。でも何とか役に立とうと奮闘する少年の物語。

＊基本、話は短く、超鈍足亀更新です。

死に方可哀想（前書き）

もともと二次創作が作りたかったので作ってみました。

もう一つの作品もありますのでこちらは不定期更新になります。

駄文しか書けない作者でアニメしか見ていないので表現が変になるかもしれませんが、暖かい目で見てくださいよろしくお願いします。

死に方可哀想

ん．．．．此処は何処だ？

おかしい、さっきまで家にいたのに

「あ、気づきましたか？」

女性の声がした

声がしたほうを見ると見事なまでに整った顔とスレンダーな体つきをした女性がいた

「あなたは？」

「私は神様だよ」

「．．．．．」

「．．．．．」

「初対面の方に言うのは少々気が引けますが、病院に行ってみては？」

「・・・・・・・・・・もう一回死にたいの？」

女性の後ろに鬼がいた

「申し訳ございません・・・・・・・・ん？神様！今何と言いましたか？」

「え？死にたいのって言ったんだけど」

「惜しい！凄く惜しい！其処じゃない！」

「もう一回の方？」

「そう！其処！もう一回死ぬってどういうことですか？！」

「・・・・・・・・君は死んだのに気づいてないの？」

「え？」

死んだ？僕が？ありえない。いつもどろりに階段をふみはずして、滑り台のようにしておりてきたただけだ

「しょうがない。本当は記憶があるはずなんだけど、君の死因を教えるよ。君の死因はいつもどろり階段をふみはずして滑り台のように滑って降りてきたこと」

「・・・・・・・・・・・・・・・・あ！！！！！」

「どうしたの？」

「思い出したよ、全て」

「そう。それで？そのあと何があったの？」

神様がニヤニヤしながら言ってきた・・・正直言いたくない。その後後ろに倒れすぎて階段に頭打ち続けたのが死因だなんて

「・・・・・・・・・・・・・・・・ふふ、心読めるって便利ね」

「心読めるんですか!？」

「読めるわよー」

「orz・・・」

「勝手に心読んでごめんね」

「・・・はあ、まあいいですよ。・・・話変わりますけど神様が
此処に僕を呼んだ理由は何ですか？」

神様と会った辺りからずっと気になっていることを聞いてみた

「忘れてた。そうそう本当は君があまりにも可哀想な死に方したから
転生か憑依をさせてあげようと思って」

「あーー転生と憑依って二次創作でよくあるアニメや漫画の世界
に行くことですよね？」

「へえー知ってるんだ。そうだよ、そのよくある転生と憑依だよ。
君はどっちがいい？」

「憑依ですね。また一から成長ってのは嫌なので」

「転生でも年を決めれば大丈夫だよ。あ、後、五つくらいなら願いを聞くよ」

「じゃあ転生で。世界は願い事に入る？」

「分かったわ。世界は特別に自由に選ばせてあげる」

「良かったー、じゃあとある科学の超電磁砲の世界で」

「はい、いいわよ。学校と学年はどうする？」

「其処まで良いんですか？」

「問題ないわ」

「そうですか、それじゃあ学校は柵川中学、学年は一年で」

「いいわよ。」

「世界とか決まったんで願いのほうにいきます」

「まず顔はいいほうで、身長は普通の中学生より頭半個分大きい身長。能力は能力キャパシテイ・トランスター譲渡レベルは4。知識は多めに。身体能力は高めにしてください」

「能力の詳細は？」

「一度見た能力を記憶。記憶した能力は他人への譲渡が出来る。記憶できるのは自分と同レベルかそれ以下の能力。記憶した能力は自分分は使用不可能。超能力以外なら自分も使用可能。例えば剣術や格闘技、楽器の弾き方等。要するに多才能力マルチスキルの一種です。」

「自分が強くなるのじゃなくていいんだ？」

「はい。僕はあまり人を傷つけないので」

「そう。でも、最初から何も能力がないのは可哀想だからなんか能力あげるよ」

「ありがとうございます。それじゃあ、発火能力と発電能力とテレポートをください」

「ええ、いいわよ。後何か頼みごとはない？」

「後は・・・お金ってどうにかありませんか？」

これが一番の問題だ。奨学金が出るにしても貯金はあったほうがいい

「通帳に成人できるまで暮らせる額は入れておくわ」

成人できるまで暮らせるっていくらだ？

「願いは五つまでって言ったのにすいません」

「別にいいわよ。私は五つ『くらい』としか言ってないから」

「そういえばそうでしたね」

「それじゃ、頑張ってください」

「・・・・・・・・・・・・・・・・あ！！さ、最後に神様仕様の木刀をください！」

「いいわよ。どんなのがほしいの？」

「木刀全体が黒で鍔が無く全長163cm、刃長130cmの木刀を」

「結構長いわね。少しだけ時間かかるわよ」

「いいですよ」

・・・・・・・・
30分後

・・・・・・・・
「出来た。これでどう？」

神様が渡してきたのは今の身長で目の辺りまでの木刀だ

主人公設定（7月18日編集）

『御剣 新羅』
みつるぎ しるら

歳 13

柵川中学所属1年

身長／体重 170／63

容姿 茶髪短髪 赤っぽい黒目 顔は上の中 10人中8が振り返るほどの整った容姿

好きなこと ギター 料理

嫌いなこと 人を見下す奴 友人を傷つける奴

性格 社交的。友達思いで面倒見がいい。子供好き（決してロリコンではない）。あまり戦闘を好まない。頼まれるといやとなかなか言えない。……。あと天然と鈍感。

能力名【キャパシティー能力譲渡】レベル4

一度見た能力を記憶し、他人に与えることが出来る。超能力以外は自分も使える。

持っている能力

発電能力 発火能力 テレポート

主人公設定（7月18日編集）（後書き）

身長は、一話で頭半分ぐらい大きい身長と書きましたが中学生の平均身長を見ると自分の身長より小さく、書いた通りにすると大きいのではなく小さくなってしまっているのでこの身長にしました。

後、能力ですが超能力だけ一定時間経てばつかえなくなるというのが詳細に付け加えさせてもらいます。

そうだ。原作キャラに会おう。(前書き)

昨日の授業中に話が浮かんできたので書きました。
原作介入はもうちょっと後になります。

そうだ。原作キャラに会おう。

ドーン

新羅が路地裏の数メートル上から落ちてきた

「……………いつつったー！！！！もう神様落とすなんて聞いてないよー！！はぁ、まあ良いや」

「君、可愛いねえこれから夜まで遊ばない？」

「……………！！」

等と愚痴って辺りを見回すと常盤台の制服を着た生徒が絡まれているのを見つけた

「んじゃ、早速行きますか！」

常盤台の生徒を助けるべく新羅は動き出した

（美琴 side）

はあ全く飽きないわね、此処は

原作の主人公、御坂美琴は今、絡まれている真っ最中だった。ここ
でいつもどおり電撃を放って撃退しようとした時だった。「そこ
お兄さん方。女の子に絡んでどうすんの？」

自分より二歳ぐらい年上に見える少年だった

まただ。美琴はそう思った。撃退しようとする決まって邪魔が入
る。今回もいつものようになると、そう思っていた。でも、今日は
違った。

「あれ！？超電磁砲じゃん！なら僕が手出す必要はないね」
少年はそう言って近くの壁に寄り掛かった。少年のことを見ていた
間に周りの男達は何処かに行ってしまった。

（side out）

「そこのお兄さん方。女の子に絡んでどうすんの？」

「ああ？誰だお前？」

男の一人が反応してきた。だが、新羅は違う事に反応した

「あれ！？超電磁砲じゃん！なら僕が手出す必要はないね（何故美

「琴が此処に?!」

美琴は周りに男達が居なくなったのに気づくとコッチにきた。

「ちよつとあんた!」

「ん? 何?」

「あんた誰よ!」

「そういえば君は僕の事知らなかったね。僕は御剣新羅、歳は13、
中学は柵川中学、能力は『キャパシテイト能力譲渡 レベル4」

「能力譲渡って何よ?」

「そのまんまだよ。一度見た能力は記憶。他人に与える事が出来る」

「自分には使えないの?」

「自分には使えない。でも、超能力以外なら自分でも使える」

「例えば?」

「剣術、体術、楽器なんでも」

「そう、それじゃ私と戦いなさい」

「うん、別に良いよ。でも君の名前も教えてほしいな」

出来るだけの笑顔で言う

／／／／／／／／／／／／／／／／

美琴が顔を真っ赤にして固まった

「どうしたの？熱でもある？」

／／／／／／／う、うんだだだだだ大丈夫／／／／／

「そう？」

「うん、大丈夫／／／」

「そっか、じゃあ名前教えて？」

「私は御坂美琴。常盤台中学よ」

「美琴ちゃんね」

「.....／／／／／」

「やっぱり熱ある？」

「大丈夫／／／だから早く戦うわよ」

「うん、でもちょっと待って」

そういつて袋から木刀を取り出した

「それは？」

美琴が疑問に思ったように聞いてきた

「なんかよくわかんないけど妖刀の木刀で、変な力は全て無効化し

「ちゃうみたい」

「そうゆう設定にした。神様に貰ったなんて言えない

「なにそれ、超能力使えないじゃない」

「僕に素手で戦えと言ってるのかい？」

「そこまで言っていないわ」

「そうだね、じゃあ始めよう！」

そうだ。原作キャラに会おう。(後書き)

・ ・ ・ ・ ・ 美琴の話し方はこんなだったか？
指摘があればどんどん言ってください。

あと、原作の日付を教えてほしいです。

家はどうしよう？

「始め方は私の持っているコインを弾いて地面に付いたらで良いわね？」

「ああ、それでいいよ」

「それじゃ、いくわよ」

美琴ちゃんがコインを弾こうとしたとき、僕と美琴ちゃんの間突然人が現れた

「え?!」

当然そこはびっくりするのだが美琴ちゃんはあまりびっくりしていなかった

「やっと見つけましたわ、お姉様」

「あっ、黒子、どうしたの？」

「もうすぐで寮の門限ですわ」

「えっ！うそ？！」

「うそ？！ではありませんの」

どうやら美琴ちゃんの知り合いのようだ。というか僕空気

「ねえ！あんた！今日はごめん！また今度会ったら闘うわよ！！」

やっと僕に来た

「ああ、うんいつでもいいから！」

僕の返答を聞くと黒子とかいう子の肩に手を置き、それじゃと言って瞬間移動していった。僕は、美琴ちゃん達がなくなった場所を十秒程見ってから携帯を手に取り時間を見た

『21..10』

.....

ご愁傷様です。

•
•
•
•
•
•
•
•
•
•

O
r
Z

「はあああ
~~~~~  
」

肺の空気が全て出るぐらいの大きなため息が出た

~~~~~

場所は変わってホテル

何故僕がホテルにいたって？

それはね、・・・・コンビニのATMでざっと10万ぐらい引き出しました。でも、びっくりだよ！神が成人できるまでの金額って言うってたけどまさか10億入ってるとは。・・・・成人とかのレベルじゃないんだよね。下手すれば・・・・いや、下手しなくても子供に遺産として、その子供が孫に遺産として残せる額なんだよね。うん、はい。まあ、ともかく、僕はホテルにいたっていうこと

んじゃ、明日も早いし、寝ます！お休み！

家どうしよう？（後書き）

何かぐだぐだ・・・しかも短い

黒子の口調もこんなだったか？

誤字脱字意見感想何でもいなのでお待ちしてます

あれ?!イレギュラーがいる(前書き)

お久振りです。winzです。

一ヶ月も間を空けてしまいました。

相変わらず、話は短く、ぐだぐだで読みにくいと思います。

あれ?!イレギュラーがいる

ピピピピッ!ピピピピッ!

規則正しい音でベットの掛け布団が捲れる

「ん、ふああ……。もう朝か・・・」

そういうながら携帯で時間を確認する『6:30』

「早く起きすぎたな。まあいいか」

そんなことをいいながら着替えを始める

今、僕は学校の前に来ています。そして時間は8：00です。
え？時間とびすぎだって？

気にしない気にしない。作者がめんどくさかったわけじゃないから

気を取り直して職員室にレッツゴー

コンコンッ

「失礼しまーす」

「今日、転入の御剣新羅です」

最初の挨拶ってこんな感じかな？

「ああ、君が新羅君だね。僕が担任の大園です。で、こっちがもう
ひとりの転校生、雨宮那貴君」

「よろしく」

・・・あれ？誰あいつ？もしかして僕以外の転生者？

「よろしくお願いします」

「じゃあ、ちょっと早いけどいこうか」

「はい」

教室前に到着。作者めんどくさがんって

(だってめんどくさいじゃん)

出てこないでよ

「よんだら入ってきてね」

「はい、分かりました」

＼side佐天＼

「佐天さん」

初春が私を呼んだ

「ん？どうしたの」

「今日、転校生が来るそうですよ」

「こんな微妙な時期に？」

夏休み前の転校って事は何かあったのかな

「しかもふたりですよ！」

「ふたりって何かあったのかな」

今度は声に出して言ってみる

「それは、分かりませんが、女子の話に寄れば、二人とも凄くかっこいいそうです。」

「へえ」

凄くかっこいいか

教室の前の扉のほうを見るとちょうど空いた

「全員、席についてください。今日は夏休み前の微妙な時期ですが転入生がふたり来ています。それじゃ、入ってきて」

「はい」

side out

「「はい」」

声を重ねて僕が先に入っていく

「右側が御剣新羅君、左側が雨宮那貴君です。」

「えーと、始めまして御剣新羅です。能力は、異能力者以下の方には喜ばれる能力です」

お、皆が驚いてる

あれ?!イレギュラーがいる(後書き)

突然のオリキャラ登場です。しかも中途半端。

・・・やっぱ口調が分らん。

こんなんで大丈夫か？

誤字脱字意見感想お待ちしてます

黒髪ロングの女の子がタイプ（前書き）

お久しぶりです。

この小説のお気に入り登録を久しぶりに確認したら18人もの人が登録してくれていました。

こんな短くてグダグダの作品をお気に入り登録してくださり感激です。では、本編をどうぞ。

黒髪ロングの女の子がタイプ

とりあえず自己紹介は終わった。
隣を見る新羅

「雨宮那貴だ。外から来た。」
お、男子がニヤついた

「能力は、外から来たばっかだから無い。特技は武道全般だからそこらへんでニヤついてる男子、間違ってもまだ人を殺したくない。なので喧嘩を俺にふっかけないでくれ」

おゝスゲェ自己紹介だな。男子全員汗かいてるよ。

「よし、今日の一時間目は僕の授業だから質問会にしよう」

大園先生が言うところクラスの皆が喜んだ。

「じゃあ、質問がある人から手挙げてください」

バツ!! ×10

女子の大半が手を挙げた。最初は、一番前の女子。

「プロフィールを教えてください」

そうきたか

「いいよ、僕からね。身長は170、体重は63。趣味は、料理とギターを弾くことってこんな感じで良いかな？」

「俺は、身長は169・9、体重は63。趣味は、修業と読書だ」

「ありがとうございます」

質問会も最後の質問になった。

作者がめんどくさがって時間が飛んだわけではないのでご了承下さい。

「このクラスでタイプの子はいますか？」

最後がそれかよ

「うーん、僕は、・・・その黒髪ロングの子かな」
思いつきり佐天ちゃんです。

「わ、私?!／／／／」
やっぱ、佐天ちゃん可愛いな

「うん、赤くなった顔なんか特に可愛い」

／／／／／／／

「真っ赤になってるけど大丈夫？」

「だっ大丈夫です!／／／」

「天然だな」ボソッ

なんか言われたけど気にしない。

「俺は、御剣が言った黒髪ロングの子の前の子だな」

雨宮は飾利ちゃんだそうだ

「じゃあ、今日はここまで。二人の席は、佐天さんと初春さんの隣だから」

・
・
・
・
・

マジですか？

黒髪ロングの女の子がタイプ（後書き）

やっぱかなり短いですね。

口調もあつてゐるかわかんないし。

それでは、誤字脱字感想お待ちしております。

身体検査って何処でやるの？（前書き）

お久しぶりです。

来年からこんな感じの更新速度でやっていくのでよろしくです

身体検査って何処でやるの？

「よろしくねーえっと、・・・」

「さ、佐天です。／＼／＼よ、よろしく／＼／」

可愛いねー涙子ちゃんは、・・・下の名前聞かなきゃ

「下の名前なんての？」

「えっと、涙子、です／＼／」

「涙子かー、涙子ちゃんって呼んで良い？」

「え！？／＼／＼べ、別に良いですけど／＼／／」

「だってよ、雨宮のことも那貴でいい？」

「別にいいが、何故そこで俺にふる」

おっ、良い切り替えしじゃん。芸人になれるよ

「なりたくも無い」

「棒読み心読みむなく、……で、そっちの女の子、名前は？」

飾利ちゃんの名前も聞かなきゃね

「初春、飾利です」

「飾利ちゃんか、飾利ちゃんもすでに呼んでるけど飾利ちゃんて良い？」

「はい、良いですよ」

「だってよー那貴、というより那貴も会話に混ざれ」

「はいはい、で、佐天に初春、だっけ？佐天の方は佐天で良いな。初春の方だが、さっきのはあくまでタイプだが、この先分からないから飾利で、良いか？」

「はい！／＼／＼では、那貴さんとは呼ばせていただいていいですか！？」

「あ、ああ」

なんか飾利ちゃんが興奮してるね

「那貴ってそんな喋るんだね」

「うるさい、おら授業始まるぞ」

まじめだね

授業をすっ飛ばして放課後

べ、別にめんどくさかったわけじゃないんだからねっ！

……作者がすいません

「あ、御剣君と雨宮君は身体検査と開発受けてもらうから準備して
いて」

「先生、そのことなんですけど、俺を此処に呼んだ知り合いの研究
所でやってもいいですか？」

「御剣君もですか？」

なーんか話が進んでるけどいいや

「はい、そうですけど何か問題ありますか？」

「いや、大丈夫だよ。他の先生には伝えて置くから」

「ありがとうございます。おら、新羅行くぞ」

「んー、先生さよならー」

「はい、さよなら」

身体検査って何処でやるの？ (後書き)

やっぱり短いですね。
では。

あらびっくり!?(前書き)

遅れて申し訳ありませんでした。

あらびっくり!?

「那貴どこ行くの?」

「お前も知ってる人だから安心しろ」

今、僕と那貴は身体検査と開発のため、僕も知っているという研究者のところに向かっている。上の会話ももう、三十回ほど続いていて那貴はとてもイラついてますみたいなオーラをかもし出しているから、後二、三回ぐらいで爆発すると思うので試したいと思います!

「那貴どこだよ?」

ぶちっ

ん?なんか聞こえたなー、とぼけるけどふざけたことやってないで早く逃げないと那貴に殺される

「そうかそうか、新羅、そんつなに殺されたいか、あア?」

.....やりすぎたね。逃げたけど那貴にすぐ捕まるって那

貴足速すぎでしょ。それでも足の速さには自信があったんだけど。とか何とかいってる間に那貴が拳を握って僕の腹に……!?

「ぐぼっ!!!!」

「ふん、さっさと行くぞ」

「ちょ……ちょっと……待って」

は、腹が! 腹が!!

やあ皆、先ほど那貴に腹を殴打されて悶絶していた新羅だよ! 時間的には跳んだけど、内容的には問題ないから気にしないで! ……
なんか電波受信した

「ついたぞ」

那貴から声がかかったので少しだけ首を上に向けると、白い外壁のいかにもって感じの建物があった

「ここにいるのか？」

「ああ、行くぞ」

中に入っていく那貴の後を追って中に入る。少し歩いてから、右に曲がり、真っ直ぐ進んだ所にある透明なドアの前に来ると那貴が右の壁にあるモニタの隣のインターホンのやつに向かって話しかけた

「ついたぞ、開けてくれ」

「ちょっと待っててね、今開けるから」

あれ？なんか聞いたことある声だぞ？と思いながら開いたドアから中に入ると見たことのある姿の女性がいた

「久しぶりね、森羅君」

そう、
声をかけてきた女性はなんとあの神様だったのだ！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4236n/>

とある交渉の能力譲渡《キャパシティトランスター》

2011年10月7日08時12分発行